

テキスト型 "Einbandtext" について: 言語学的文体論から比較文章構成論へ

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード: 作成者: 西嶋, 義憲, Nishijima, Yoshinori メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00000422

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



テキスト型 "Einbandtext" について

—言語学的文体論から比較文章構成論へ—

西嶋 義憲

0. はじめに

本稿で扱う対象は、ドイツ語書籍の表紙に印刷されている内容紹介文である。このテキストには必ずしも固定した名称があるというわけではないので、ここではとりあえずEinbandtext (以下ETと略す)と呼んでおくことにする¹⁾。このテキストは、さまざまな理由から比較的まとまった内容形式と表現形式²⁾をもっていると思われる。そこで、このテキストを言語学的文体論(linguistische Stilistik)の考え方を利用して分析することにより、そのような内容形式と表現形式を一般的な形で、すなわちテキスト型(Textmuster)³⁾として抽出・記述することを試みる。これによって、使用状況(Gebrauchssituation)はテキストの内容形式と表現形式に影響を与えていることが検証されるだろう。つぎに、この試みから一歩進んで、ドイツ語のETと同一の機能をもつと考えられる、他言語(ここでは日本語)のテキスト⁴⁾との比較を手短かに行なう。これは、比較文章構成論(kontrastive Textstrukturanalyse)のための基礎を提供するはずである⁵⁾。

1. 言語学的文体論と比較文章構成論

テキストを対象としたテキスト言語学(Textlinguistik)は、テキストを扱う視点の違いによって、大きく2つに分けることができる。ひとつは、どちらかというテキストの表面的な構造(Struktur)を対象とするマイクロレベルのテキスト研究であり、他のひとつは、どちらかというテキストの抽象的な意味構造を扱うマクロレベルのテキスト研究である⁶⁾。そして、後者が前者として実現される過程を対象とするのが、ある意味での文体論(Stilistik)となる。そこでは、表現形式の選択が起こっているからである⁷⁾。

上述のテキスト研究は、テキストの構造面に焦点をあてていると言えるが、テキストはさらに、機能(Funktion)という観点からも分析されうる⁸⁾。すなわち、テキストは、コミュニケーション上のひとつの道具として、それが使用されるコンテキストにおいてある種の機能をもつ、あるいはある種の発話行為(Sprechakt)⁹⁾を遂行することになるからである。

コンテキスト(使用状況)によって、テキストの意味と形態はある種の制約を受け、定形化されうる。これは、慣習的な¹⁰⁾テキスト型として記述することができる。テキスト

における機能と意味形式および表現形式との関係を扱う、このような分野を言語学的文体論と呼ぶ。以下では、まず言語学的文体論の基本的な考え方をSandig(1978)にならって概観する。つぎに、その言語学的文体論に手を加え、そこに牧野(1980)の比較文章論の発想を取り入れることによって、比較文章構成論を提案する¹¹⁾。さらに、ここで行なわれる分析の対象と方法について述べる。

1.1 言語学的文体論

言語学的文体論の基本的な発想は、Sandig(1978)に見られる。Sandig(1978)では、言語実用論(linguistische Pragmatik)に基づいて言語学的文体論の構築が試みられている。それによれば、まず、あるひとつのテキストについて、その使用条件との関わりの中で、テキスト全体の発話行為(Textillokution)を規定する。そして、その発話行為とそのテキストを構成する個々の文の発話行為とを関係づける。さらにそのテキストを構成する個々の文に関しては、その表現形式とそれが実現する発話行為との関係が規定される。この関係づけは、Formulierungと呼ばれる。このテキスト発話行為—個々の文の発話行為—個々の文の表現形式の3者関係に基づき、ひとつのテキストに関して、表現形態と発話行為のセットが指定される。これによってテキスト型(Textmuster)が特定される。もちろん、このようなテキスト型が設定できるテキストは、慣習化された実用文(Gebrauchstext)に限られている。

Sandig(1978)では、この考え方に基ついて星占い(Horoskop)が分析されている。すなわち、星占いというテキスト型は、その使用条件によって異なる実現形態をもつ¹²⁾。それらを比較することにより、テキストの使用条件による表現形態への制約を抽出している。この同一のテキスト型の異なる実現形態は、変異体(Variante)と呼ばれる¹³⁾。

この発想自体は、テキストの機能と表現形式とを関係づけている点で、優れていると言えよう。しかし、特に文体に焦点をあてているので、意味形式を介在させずに表現形式と発話行為とを直接に関係づけようとしている。そのため、テキスト型の意味形式の記述が不十分に終わっているように思われる。テキスト型間の比較のためには、テキスト型の規定に意味構造が含まれている必要がある。

そこで、テキスト型に2つのレベルを区別し、一方を抽象的な意味・機能構造、他方をその実現形態である表現構造とする。前者の意味・機能構造を表わす概念としてテキスト行為(Textakte)¹⁴⁾という表現を用いることにする。両者のレベルの間関係を扱う分野をここでは言語学的文体論と呼ぶことにする。

1.2 比較文章論

文章の比較には、大きく分けて2つの可能性がある。ひとつは、同一言語内での比較、他のひとつは、異なる言語間の比較である。前者の一部は、Sandig(1978)でなされているような同一のテキスト型の異なる実現形態(変異体)間の比較である。後者は、対照言語学的な観点からの異なる言語の表現の比較である。ここでは、後者の可能性について考え

る。

比較文章論(contrastive discourse analysis)という発想は、牧野(1980)に見られる。牧野(1980)では、文章構成上の日英語の差異に注目し、機能上同一の日英語の文章が比較されている¹⁵⁾。しかし、「機能上同一の」といった表現で表わされているのは、言語学的文体論という同一のテキスト型の実現形態としてのテキストではなく、異なる言語の異なるテキスト型の実現形態である。言語が異なれば、当然、意味・機能構造である抽象的なテキスト型も異なるにもかかわらず、単に、同一の機能という考え方で分析が進められている。そこでは、そもそもテキスト型という考え方は提出されていず、また、テキスト型を設定した上で日英語の文章を比較しているわけではない。

ここで提案したいのは、比較文章構成論という発想である。これは、言語学的文体論と比較文章論とを統合したものである。つまり、まず、比較されるべき2つの言語について、意味・機能構造としての抽象的なテキスト型をそれぞれ設定し、テキスト型に関する差異を問題とする。その上で、両言語の具体的な表現形式を比較していくのである。

1.3 本稿の分析方法

上の1.2において比較文章構成論という考え方を提出したが、本稿の目的は、必ずしもその考え方に基づいた分析にあるわけではない。むしろ、そのためのひとつの足掛かりを提供するのが目的である。すなわち、ETの意味・機能構造とその表現形式とを記述することに重点が置かれている。比較は、したがって、十分な形ではなされない¹⁶⁾。

ここでテキスト型の記述のための方法を素描しておこう。まず、ETに含まれる可能な意味情報を抽出する。可能な意味情報という表現を用いたのは、必ずしも、ひとつのテキストに以下で分析される情報がすべて含まれているわけではないからである。つまり、抽象的なテキスト型には、ETに含まれる可能な情報のすべてが記述され、具体的なテキストは、その情報の集合から選択されると考える。ところで、その情報は、ET全体の機能との関係でどのようなテキスト行為を実現するかが規定される。このような操作によって抽象レベルのETの意味・機能構造が仮定される。

意味と機能の仮定が済んだら、つぎは具体例で、実際にどのような表現形態が個々の意味と機能を実現するために使用されているのかを明らかにする。これは、実現形態としてのETの分析である。この2つの作業によって、ETに特有のパターン(Formulierungen)が抽出されることになる。

以上の素描からすでに明らかなことだが、あるテキスト型の意味・機能構造は、典型的な形で記述される。ひとつのテキストに、そのテキスト型を構成している情報のすべてが実現されている場合(プロトタイプ・テキスト)から、そのテキスト型の主要な情報の一部しか実現されていない場合(周辺テキスト)まで、具体的なテキストの変異は、さまざまありうる¹⁷⁾。

2. ETの特徴

ETとは、すでにふれたように、ドイツ語書籍の表紙に印刷されている書籍内容紹介文のことである。ここでは、ETの実用論的(pragmatisch)な特徴と意味論的(semantisch)な特徴を規定する。

2.1 ETの実用論的特徴

ここで扱うETは、比較という目的のために、言語学関係の書籍のものに限定する¹⁸⁾。

すでに明らかなように、ETは、書籍内容の紹介文として書籍の表紙に印刷されている。つまり、その文章は空間的な制約をかなり受けているが、そこには、書籍の内容を紹介するためにいくつかの必要な情報が盛り込まれなくてはならない。したがって、与えられる情報は、コンパクトに収められる必要がある¹⁹⁾。このような条件を、ここでは空間的条件と呼ぶことにしよう。以下で示されるように、この空間的条件によってETの表現形式はかなり特徴づけられていると言える²⁰⁾。

テキスト研究で通常問題にされるのは、テキストの書き手と受け手との関係である。ETは、書籍内容を紹介するために書かれた文章や、目次、本文、書評(Rezension)などの引用からなる。書評の一部が引用されてある場合は、署名があるため書き手が特定できるが、たいていの場合、ETの書き手は、不明である。他方、ETの受け手は、書店で書籍を手にする人をも含めた多くの潜在的な読者と言える。そのため、広く一般に読まれることになる。したがって、この意味では、一般の広告と変わりはないと考えていい。このような特徴を、ETの広告的特徴と呼ぶ。以下で明らかにされるが、この広告的特徴によって、ETの表現形式(とくに語彙)の選択は影響を受けている²¹⁾。

つぎに特定しなくてはならないのは、ETの機能としてのテキスト行為である。このテキストのもつ主要(dominant)な行為は、書籍内容の紹介や著者の経歴紹介という情報伝達行為(Informieren)であろう。付随的な行為として評価(Bewerten)が行なわれることがあり、また、さらに対象読者を指定する指示行為(Referieren)がある。こういった複数の行為によって、ETは、潜在的な読者に対して間接的に推薦行為(Empfehlung)を遂行していると考えられる²²⁾。

2.2 ETの意味論的特徴

ETの情報内容は、テキスト行為の抽象的な意味形式を規定するものであるが、4つに大分することができる。すなわち、書籍内容、書籍の評価、対象読者の指定、著者の経歴である。特に、ETでは、最初に挙げた書籍内容が中心となり、さらにその情報はいくつかの下位分類できる。すなわち、テーマに関する一般的説明、書籍のテーマ、書籍の目的(意図)、テーマを扱う方法や視点、書籍の特徴などである。情報が多岐にわたるため、このような情報をコンパクトにほうり込むための枠組、つまり内容構成法が必要になると考えられる。そこで、それぞれの情報に関して、実際にどのような表現が使用されているのかを見ていくことにより、ETの形態上の特徴を明らかにできるはずである。

3. ETの分析

すでに述べたように、ETの意味情報には4種類ある。それぞれについて、具体例を挙げながらどのような表現がなされているのかを見ていく²³⁾。ただし、以下の情報の分類は、便宜的なものであって、絶対的なものではない。これらの情報は、実際には交錯した形で実現されることもあるからである²⁴⁾。したがって、個々の例においては、とくにその項目で問題となる情報を中心に取り出し、付随情報については、示唆するにとどめる。

3.1 書籍内容に関する情報

書籍内容に関する情報は、ここではつぎの7つに分けて分析する：テーマに関する一般的情報；書籍の成立事情；書籍の目的あるいは意図；内容；内容構成；特徴；利用法。

3.1.1 テーマに関する一般的情報

この情報は、潜在的な読者に書籍が扱っているテーマに関して背景的な知識を提供するものである。したがって、テーマ自体の説明と、テーマ化を要請する学問的・歴史的状況の説明が主な内容となることは明らかである。

- 1) Die linguistische Pragmatik als neue sprachwissenschaftliche Disziplin versteht Sprechen als Handeln, das in soziale Situationen eingebettet ist. (B.Schlieben-Lange: "Linguistische Pragmatik")
- 2) In der jüngsten Vergangenheit hat die Zahl der empirischen Arbeiten zum Zweitspracherwerb sprunghaft zugenommen. Es gibt auch eine Reihe von Versuchen, die einzelnen Befunde in allgemeine Theorien umzusetzen. (W.Klein: "Zweitspracherwerb")

1)は、テーマ自体の説明であり、2)は、テーマの学問的研究現状の説明である。この例では、たとえば、"neu", "sozial", "jüngst", "heute"といった特徴的な語彙によって、テーマ自体が旧来のものとは異なり、また、現代において価値のあるものであることが表現されている。つまり、3.3で述べる評価とも関わっているのである。

3.1.2 書籍の成立事情

テーマに関してその概略が提示されれば、次に来るべき情報は、書籍の成立事情と目的であろう。すなわち、どのような事情により、あるいはどのような目的によって書籍が書かれたのかを表わす情報である。ここでは、両者を分け、目的については3.1.3で述べることにする。

- 3) Das Buch ist aus der Praxis des Universitätsunterrichts an Studienanfänger entstanden. (D.Wunderlich: "Arbeitsbuch Semantik")

- 4) Das »Lektürekolleg zur Textlinguistik« ist aus schriftlichem Lehrmaterial hervorgegangen, das als Basis von Kontaktstudien- bzw. Lehrerfortbildungskursen in »Linguistik« diente, (...)
(W.Kallmeyer et al.: "Lektürekolleg zur Textlinguistik")

3)と4)はともに、書籍の成立した背景あるいは事情を述べている。したがって、特徴的な構造として通常"A ist aus B entstanden/hervorgegangen." (A は書籍、B は背景を表わす) といった形式が規定できる。動詞としては、成立を意味する語彙が使用される。時制は、主に過去ないし現在完了が用いられるはずである。

3.1.3 目的あるいは意図

ETでは、著者／書籍の意図あるいは目的が述べられることがある。そのような例を挙げてみよう。

- 5) Der Autor will aus der Sicht der Linguistik dazu beitragen, die Kluft zwischen Sprachwissenschaft und Literaturwissenschaft durch interdisziplinäre Zusammenarbeit zu überbrücken.
(B.Spillner: "Linguistik und Literaturwissenschaft")
- 6) Das Buch will elementare, aber gründliche Einführung in eines der am heftigsten diskutierten Gebiete der modernen Linguistik sein.
(H.E.Brekle: "Semantik")
- 7) Das Ziel der vorliegenden Arbeit ist ein zweifaches: (...)
(D.Franck: "Grammatik und Konversation")

5)と6)は、それぞれ著者と当該の書籍が主語となって話法の助動詞(wollen)を用いてその意図が提示されている。7)では、目的を明示的に表現する"Ziel"という語が使用されている。他の例においてもだいたいこのような語彙と構造が用いられる傾向にあるが、場合によっては、"versuchen", "Versuch"という語で、著者／書籍の意図が表示されることもある。なお、5)と6)には、それぞれ"die Kluft zwischen Sprachwissenschaft und Literaturwissenschaft", "der am heftigsten diskutierten Gebiete der modernen Linguistik" といったように、テーマに関する一般的情報や成立事情を示唆する内容も見られる。

3.1.4 内容

ETの主要な情報は、書籍内容紹介である。これは、どのようなテーマをどのように扱うかという点に関する情報を与える。ここでは、内容紹介についてどのような表現が用いられているのかを分析する。書籍の内容紹介と内容構成は、密接に関係しているが、後者の表現については次の 3.1.5で述べる。

- 8) In diesem Buch wird systematisch untersucht und exemplarisch illustriert, nach welchen textlinguistischen Kriterien jeder konkrete Text einerseits als Textsorte klassifiziert werden kann, (...)
 (E.Werlich: "Typologie der Texte")
- 9) In Auseinandersetzung mit der umfangreichen Forschung werden die theoretischen Voraussetzungen wie die praktischen Erfordernisse linguistischer Stilanalyse dargelegt. Im Anschluß an die Erörterung der Prinzipien stilistischer Textrezeption wird ein Analyse-Modell entwickelt, (...) (W.Sanders: "Linguistische Stilistik")

8)では、"...wird ...untersucht und ...illustriert." という形式が用いられているが、ある対象、つまりテーマをどのように扱うのかが動詞で示されている。他方、9)では "In Auseinandersetzung mit ...", "an die Erörterung ..." といったように、上で述べた動詞から派生された名詞を含む前置詞句が用いられている。

内容紹介で使用される動詞／動詞句の例はいくつかに分けられる²⁵⁾ :

- 導入) einleiten, einführen, eine Einführung leisten/geben;
- 素描) skizzieren, zeigen, eine Übersicht liefern, einen Überblick geben;
- 説明) erklären, erläutern, erörtern, auseinandersetzen, diskutieren, darstellen, darlegen;
- 記述) behaupten, behandeln, beschreiben;
- 拡張) entwickeln, erweitern, usw.

いずれにせよ、内容紹介で用いられる動詞は論文などで使用される語彙であると言えよう²⁶⁾。これは、書籍のテーマが言語学という学問分野であることによる影響であり、また、それによって対象読者が限定されているためである。

内容紹介に使われる名詞／名詞句は、上の動詞を名詞化した表現である： Kritik, Einführung, Erklärung, Darstellung, Integrierung, Verknüpfung, usw.

3.1.5 内容構成

内容に関する情報には、内容がどのような順序で配列されているかという内容構成についてもふれられている。その際、どのような表現手段を用いてその順序を示しているのだろうか。

- 10) In der Einleitung werden ...skizziert. Im größten Teil sind ... Ein

weiteres Kapitel behandelt ... Das Schlußkapitel zeigt ...
(W.Dressler: "Einführung in die Textlinguistik")

この例では、"In der Einleitung", "Im größten Teil", "Ein weiteres Kapitel", "Das Schlußkapitel" という表現が見られる。他の順序指示表現を挙げておく: "zweifaches: Einmal X . Zum anderen Y .", "Im ersten Teil X . Im zweiten Teil Y .", "Nach X erfolgt Y . Im Mittelpunkt steht Zferner A .", "Im Anschluß daran ...", usw.

ETは、空間的条件に制約を受けているので、内容をコンパクトに、そして理解し易いようすみやかに伝える必要がある。そのため、上のような順序を示す表現が用いられると考えられる。

3.1.6 特徴

これは以下の 3.3で取り上げる評価と密接に関わっている。Empfehlungというテキスト行為を遂行するために、ETは、単なる内容紹介で終わる場合は少ない²⁷⁾。書籍の特徴についてふれられることが多い。

12) Die wichtigsten Begriffe sind am Schluß zu einem Glossar zusammengestellt. (D.Wunderlich: "Arbeitsbuch Semantik")

13) Sämtliche Beiträge des »Readers« werden durch erläuternde Vorspanne eingeleitet.

(W.Kallmeyer et al.: "Lektürekolleg zur Linguistik")

この例では、当該の書籍に対象読者にとって有益なものが含まれているという情報が与えられている。

3.1.7 利用法

これも以下の 3.3で述べる評価と関わっているのだが、ETでは当該の書籍の利用法について言及されることがある。その際、対象読者にふれられることが多い。対象読者の指示行為については、つぎの 3.2を参照。

14) Das Buch soll als Arbeitsgrundlage für Einführungsveranstaltungen in die Sprachwissenschaft und in die Semiotik dienen. Es kann in Universitätskursen, aber auch in Leistungskursen der Sekundarstufe II verwendet werden. Viele Übungsaufgaben sind zum Selbststudium geeignet. Der Lehrer findet Anregungen zur Gestaltung von Arbeitsaufgaben und Demonstrationsbeispielen.

(D.Wunderlich: "Arbeitsbuch Semantik")

この例では、利用法を述べるのに"sollen", "können"という話法の助動詞が用いられている。これによって、書籍の利用可能性が表現されている。動詞としては、"verwenden", "dienen", "eignen"というように利用あるいは適切という意味を含む表現が用いられている。これは、他の例にもあてはまる。

3.2 対象読者の指示行為

これは上の 3.1.7と密接に関わった形で言及される。言うまでもなく利用法の言及とは、読者に対してなされるものだからである。

- 15) Der Band ist vor allem bestimmt für die Studenten der Germanistik, Anglistik, Romanistik, Slavistik, der allgemeinen Linguistik und der Sozialwissenschaften. (H.E.Brekke: "Semantik")
- 16) Die Beachtung von Erzähltextmodellen sowie ausführliche Register machen dieses Buch zu einem wichtigen Arbeitsinstrument nicht nur für den Linguisten, sondern auch für den primär literaturwissenschaftlich interessierten Leser.
(E.Gülich/W.Raible: "Linguistische Textmodelle")

上の例に典型的に現われているが、対象読者の指示は、通常 "für A" (A は対象読者を表わす) という形式をとる。また、"geben", "liefern", "widmen"といった授与動詞が使われることもある。

3.3 評価

この評価というテキスト行為は、必ずしもETの主要な構成要素である必要はない。その点で、書評とは異なると言える²⁸⁾。しかし、潜在的な読者に購買を促すテキスト行為であるEmpfehlungを遂行するためには、ある程度この評価行為が含まれなければならないだろう。したがって直接的でなく、他の行為に付随して行われることが多い。例を見てみよう。

- 17) Der Band wird durch eine ausführliche Bibliographie, einen Sachindex und ein Verzeichnis der Terminologie abgeschlossen.
(W.Dressler: "Einführung in die Textlinguistik")
- 18) "Das Buch zeichnet sich vor einer Reihe von Publikationen mit gleicher Zielsetzung dadurch aus, daß es die für die nicht auf einer einzigen Ebene ansiedelt."

(E.Werlich: "Typologie der Texte", zitiert aus H.Klein: Praxis
Deutsch)

例 18)は、書評からの引用であるため、その著者名が記されてある。

評価行為は、18)のように動詞句("...zeichnet sich vor...dadurch aus...")で直接的に表現されるより、17)のようにある種の形容詞を伴った名詞句("eine ausführliche Bibliographie")によって間接的に表現されるのがふつうである。当然のことだが、こういった形容詞は、書評とは異なり、すべて肯定的な意味を有する²⁹⁾。これは、すでに指摘したようにETが広告的な特徴を持っているからである。肯定的な意味をもつ、こういった形容詞は、いくつかのタイプに分類することが可能である：

- 広がり： umfassend, umfangreich, all;
- 重要さ： wichtig (wichtigst), bedeutend;
- 有用性： verwendbar, nützlich, praktisch, praxisbezogen, praktikabel;
- 詳細さ： ausführlich;
- 新しさ： neu (neuer), am ehesten;
- 総合性： systematisch, integrierend, interdisziplinär, integrativ, usw.

動詞句の例としては、18)の他には、"so überzeugend, daß..."を挙げることができる。ただし、この例は18)と同様、書評からの引用である。

3.4 著者の略歴紹介

書籍の内容紹介とは別に、著者の略歴を情報として提供することがある。これは、ある意味では、権威づけと言える。

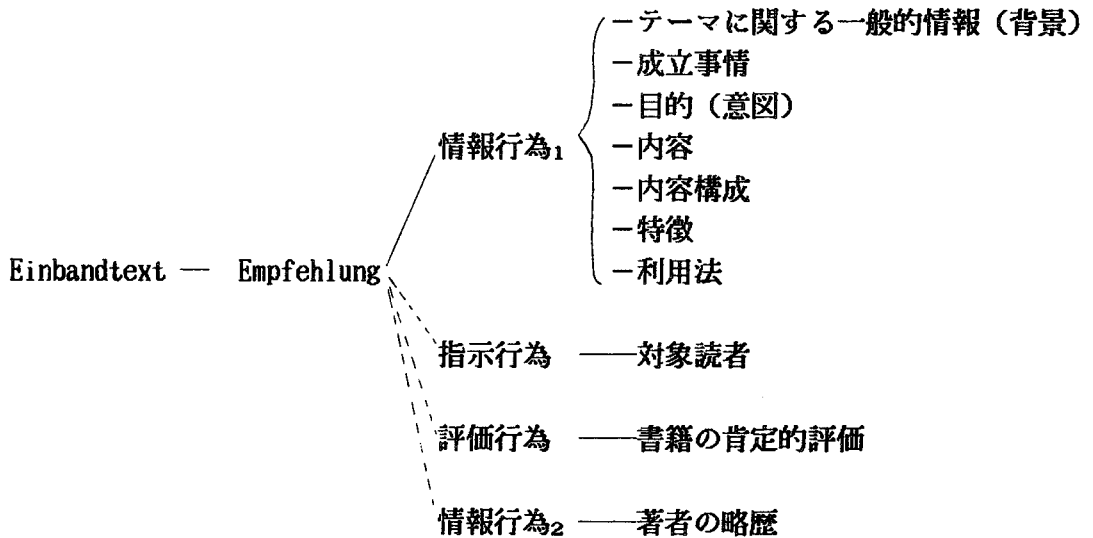
19) Der Autor: Dr.Wolfgang Klein ist gegenwärtig Professor an Max-Planck-Institut für Psychologie in Nijmegen/Niederlande. Er ist durch zahlreiche Veröffentlichungen zu Themen der Linguistik bekannt geworden.
(W.Klein: "Zweitspracherwerb")

この例では、職業、職場、専攻分野、出版物のテーマが与えられている。他の例では、生年が書かれてあったり、学歴、職歴などにふれられることもある。いずれにせよ、基本的な形式は、"A, geb. B, ist C für D an E." (A, B, C, D, E は、それぞれ人名、年、職業、専攻分野、職場を表わす)となる。

3.5 まとめ

これまで、言語学関係のETのテキスト型に関して可能な意味・機能構造と表現構造とを

対応させながらETを分析してきた。ここでまとめを行なっておく。設定されたETのテキスト型を規定する抽象的な意味・機能構造はつぎのようになる³⁰⁾：



中央の項目と右端の項目は、それぞれ機能と意味を表わしている。ETの主要な機能と意味が、書籍の意味内容の伝達にあることは、実線で示されている。このような意味・機能構造からなる抽象的なテキスト型が実現された場合は、ここで扱われたETのテーマが言語学のため、学問的な用語や言い回しが用いられることになる。

4. 比較文章構成論へ向けて

すでに述べたように、比較には2つの視点がある。ひとつは同一言語内での比較であり、他のひとつは異なる言語間の比較である。前者は、Sandig(1978)などで行なわれ、同一テキスト型の変異体として記述されることはすでに述べた。本節では、異なる言語（ここでは日本語）のテキストと簡単に比較することによって、日本語とドイツ語との文章構成上の差異を示唆したい。

*

ETに相当するものとして、日本語においても言語学関係の書籍の表紙テキストを選ぶことにするが、日本語のETの数は、それほど多くはない。翻訳された書籍は、原書のETの影響を受けている可能性が高く、場合によっては原書の翻訳であることもあるので³¹⁾、ここでは考慮しない。そのため、ますますETの数は限定されてしまう。

ドイツ語のETとしては、テキスト型の意味・機能構造に関して、なるべく日本語のと同程度のものを選ぶ。つぎのテキスト³²⁾は、ドイツ語のETにしては情報量が少なく、かなり抽象的な内容と言える。

ードイツ語のETの例：

- ① Die Linguistische Pragmatik als neue sprachwissenschaftliche Disziplin versteht Sprechen als Handeln, das in soziale Situationen eingebettet ist.
② Schlieben-Lange gibt eine kritische Einführung in die verschiedenartigen, miteinander konkurrierenden Ansätze in dieser sprachlichen Disziplin und trägt damit zur Klärung strittiger Fragen bei.
③ Abschließend ist die Bedeutung pragmatischer Forschungsergebnisse für andere sprachwissenschaftliche Bereiche behandelt.
(B.Schlieben-Lange: "Linguistische Pragmatik")

この例は、主に書籍の内容に関する情報を提供している。①は、テーマに関する背景情報であり、テーマへの導入にあたる。②と③が、書籍の内容に関わる。"kritische Einführung", "Klärung", "behandelt"によって、「本書」の内容が大まかに提示されている。むだがなく、書籍内容だけを伝えていると言えよう。

ー日本語のETの例：

- ①ことばとは何か？ ②視る角度によって、当てる光によって、ことばは姿をかえる。③教養としての「ことばの学」は誰にもわかる事実としてのことばを対象にする。④いわば自然でノーマルな言語である。⑤この意味での言語学は科学であって、哲学ではない。⑥科学は普遍的知識の探求を目的とする。⑦誰の手にも届く常識の学である。⑧教養は一般的なものであって、決して個人的なものではない。⑨事実としてのことば、それが本書の出発点である。⑩本書は、碁・将棋でいえば定石のようなもので、教養として必要な最も基本的な問題を簡潔に解説していく。⑪より高度の言語学に進む第一階梯である。
(島岡 茂：『教養としての言語学』)

①から⑧までが、「本書」のテーマへの導入となっている。すなわち、テーマに関する背景知識が与えられている。⑨から⑪までが「本書」の内容にあたる。量のわりには、実際具体的に、どのような問題がどのように扱われるのかが示されていないという意味で、「本書」の内容に関する情報が少ないと言えよう。

*

ここで、ドイツ語と日本語のETを簡単に比較してみよう³³⁾。両者とも、テーマに関する背景と内容の2つからなっているので、意味・機能構造は、同じと言える。まず、導入部を考えてみる。ドイツ語のほうは、あっさりとして情報を与えているが、日本語では、テーマに向かって一直線に進んでいず、ふらふらした印象を受ける。また、日本語のは、①で疑問文を用いて、潜在的な読者に直接に訴えかけているが、ドイツ語のは、実にsachlichである。

つぎに、書籍内容の情報についてだが、具体さのレベルで日本語とドイツ語は異なっているように思われる。すなわち、ドイツ語のETと比べると、日本語のは、かなり大雑把で表面的だと言える。

全体的には、日本語のほうは、文章の内容が一直線に進んでいないため³⁴⁾、ドイツ語のに比べて、潜在的な読者にとっては不親切と言ってよからう。

5. 結び

残された問題は多いと言わなければならない³⁵⁾。

ここでは、もっぱら言語学的文体論の考え方を利用して、ドイツ語のETのテキスト型を抽象的な意味・機能構造レベルと具体的な表現形式のレベルで規定する作業が中心となった。分析の対象となったテキスト自体の範囲が言語学関係の書籍という、非常に限定されたものなので、ここで設定されたテキスト型が、他の分野の書籍についてもあてはまるかどうかは不明である。おそらくここで設定されたETとは異なるものとなるであろう。この検証は、今後の課題となろう。

ETというのは、テキストに関するテキスト³⁶⁾である。このようなテキストに属するのは、ETの他に、書評、序文、要約などがある。これらのテキストは、もちろんテキスト型が異なるが、抽象的な意味・機能構造レベルでは、似ているように思われる。このような異なるテキスト型間の比較もなされるべきであろう。

ひとつの言語のある特定のテキストについてそのテキスト型を設定して、他の言語のテキスト型と比較する作業、すなわち比較文章構成論は、まだ緒についたばかりである。比較文章構成論とそれに基づく分析については、ここではわずかしかふれることができなかった。理論化が不十分であることは確かであるが、だからといって、この研究の意義を損なうことにはならないだろう。この方向での研究は、翻訳や外国語教育などの実際的な分野においても貢献をもたらすはずだからである。

注 釈

- 1) ETには、書籍内容を紹介するために書かれた文章や、目次、本文、書評(Rezension)などからの引用といったものが含まれる。なお、ETにかわる他の可能な名称としては、Umschlagstext が挙げられる。また、同様の機能を有するテキストには Klappentextがあるが、使用されるコンテキスト(使用状況)が異なるためここでは考察の外にある。
- 2) 意味構造と表現構造とも言える。いずれにせよ、実質ではなく、形式を問題にする。
- 3) Textmuster, Textsorte, Texttypといった用語の違いは、ここでは考慮しない。
- 4) ドイツ語のETに相当する日本語のテキストとしては、帯広告(いわゆる「腰巻」)の他に、ドイツ語のETと同様に表紙に印刷されているテキスト(日本語のET)がある。ただし、帯広告とETとは、機能や表現に関して、かなり異なっていると言える。しかし、

この点については立ち入らない。なお、西嶋(1987a, b)では、帯広告で使用される特徴的な語彙や統語構造が分析されている。

- 5) 比較文章構成論という用語は、筆者の造語である。これは、テキスト型を利用して異なる言語の文章を比較する研究である。本稿の目的との関係上、その基本的な発想を提示するにとどめる。この詳細は、西嶋(1988)で明らかにされる。したがって、本稿は、予備的考察という性格をもつ。
- 6) 池上(1985: 87), Sowinski(1983: 92)を参照。
- 7) 池上(1985: 63)を参照。
- 8) 近年のテキスト言語学では、機能という観点をも含めた分析が主流になりつつある点については、Brinker(1985) とHelbig(1986)を参照。
- 9) とくに発話行為の認定に関する問題については、西嶋(1986)で論じられている。
- 10) 慣習(Konvention)については、Wunderlich(1975)を参照。
- 11) 言語学的文体論や比較文章構成論については、テキスト型との関係で西嶋(1988)で詳しく論じる予定なので、ここではあまり立ち入らない。
- 12) 購買層の異なる "Bildzeitung" と "Stern" とに掲載されている "Horoskop" が比較されている (Sandig: 1978: Kap.6)。
- 13) 構造主義言語学で用いられた type-token の対立を考えればわかり易いだろう。
- 14) "Textakte" という発想は、Zillig(1980)に見られるが、本稿では、その発想に意味形式を統合することによって、手を加えている。
- 15) 牧野(1980: 第 6章) を参照。
- 16) 詳細な比較は、注5)で述べたように、西嶋(1988)でなされる。
- 17) この基本的な発想は、プロトタイプ論から受けている。プロトタイプ論については、Coleman/Kay(1981) と益岡(1987)を参照。なお、Coleman/Kay(1981) では、"lie" という英語動詞が分析されているが、この動詞は、対応する日本語の「うそをつく」という動詞句とはその用法が異なっている。この比較は、別の機会に論じる予定である。
- 18) 調査の対象となった言語学関係のドイツ語書籍のETの総数は43である。
- 19) もっともコンパクトなのは、目次だけが引用されたETである。
- 20) 帯広告の空間的条件による表現形式への影響に関しては、西嶋(1987b) を参照。
- 21) 帯広告の特徴的な語彙については、西嶋(1987a) を参照。
- 22) 広告の機能が Aufforderung の内の Empfehlung である点については、Flader(1975: 347 ff.)を参照。なお、Große(1976: 19) にも同様の指摘がなされている。
- 23) 以下で引用されるETの例の出典については、著者名と書名だけを挙げる。
- 24) 複合行為あるいは "eingebettete Sprechakte" については、注29) を参照。
- 25) この分類には、Wehrle-Eggers(1961) を利用した。
- 26) Wehrle-Eggers(1961: 201f.)を参照。
- 27) もちろん、すでに注19) で指摘したように、目次だけを引用したものもある。
- 28) 書評(Rezension) については、Zillig(1982)を参照。

- 29) 書評は、通常批判的である。その点については、Zillig(1982)を参照。また、広告表現には肯定的なものが多い点は、Große(1976: 19)で指摘されているが、ETで使用される語彙は、中立的ないしは否定的なものも肯定的な意味に変換されることがある。これは、ET全体のテキスト行為に制約を受けているためであろう。さらに、ETには、書評の文章が引用されることがあるが、これは本来ETのために書かれたものではない。したがって、ここでもある種の機能変換が起こっている。こういったテキストにおける機能変換、さらには注24)のような複合行為などに関しては、別の機会に論じる。
- 30) テキスト型を規定する抽象的な意味・機能構造は、Dijk(1980)の Superstrukturに対応しうるものであるが、その相違については、ここでは立ち入らない。
- 31) 例を挙げる余裕はないが、とくに専門書では、原書のETが訳されているものがある。
- 32) 便宜上、一つひとつの文に番号を付けた。以下の日本語のETも同様である。
- 33) 本稿の目的との関係上、比較に関する考察は、表面的にならざるをえない。
- 34) 牧野(1980)では、日英語の料理法のテキストが比較され、「日本語のは、原則的には英語と同じだが、〔段落の〕推移の仕方が英語のように直線的ではなく、何かたゆたう印象を与える」と指摘されている(123 ページ)。
- 35) このような問題の一部は、西嶋(1988)で扱われる。
- 36) テキストに関するテキスト("Text über Text")については、Dijk(1980: 156)にふれられている。なお、この研究は、文章要約論といった研究分野の開拓につながる。

参 考 文 献

- Brinker, Klaus(1985): Linguistische Textanalyse. Berlin: Erich Schmidt, 1985.
- Coleman, L./P.Kay(1981): Prototype Semantics: The English Word *Lie*, in: Language 57, 1981, S.26-44.
- van Dijk, Teun A.(1980): Textwissenschaft. Tübingen: Niemeyer, 1980.
- Flader, Dieter(1975): Pragmatische Aspekte von Werbeslogans, in: D.Wunderlich (Hg.): Linguistische Pragmatik. Wiesbaden: Athenaion, 1975(1972), S.341-376.
- Große, Ernst Ulrich(1976): Text und Kommunikation. Stuttgart et al.: Kohlhammer, 1976.
- Helbig, Gerhard(1986): Entwicklung der Sprachwissenschaft seit 1970. Leipzig: Bibliographisches Institut, 1986.
- 池上嘉彦(1985): 『詩学と文化記号論』, 筑摩書房, 1985 (1983).
- 牧野成一(1980): 『ことばと空間』. 東海大学出版会, 1980(1978).
- 益岡隆志(1987): 「プロトタイプ論の必要性」, in: 『言語』Vol.16, No.12, 1987, S.38-45.

- 西嶋義憲(1986):「発話行為の認定に関する覚え書き」, in: "TREFF-PUNKT-SPRACHE" (広島大学文学部独文研究室編) Nr.4, 1986, S.126-135.
- (1987a):「『腰巻』の言語学(1) 一帯広告表現の語彙とその機能について」, in: 『広島ドイツ文学』(広島独文学会編)第2号, 1987, S.77-90.
- (1987b):「『腰巻』の言語学(2) 一帯広告表現の統語論的特徴とその機能について」, in: "TREFF-PUNKT-SPRACHE" Nr.6, 1987, S.25-39.
- (1988):「テキスト型と比較文章構成論(仮題)」, 広島大学博士課程後期研究論文, 1988(予定).
- Sandig, Barbara(1978): Stilistik. Berlin: Walter de Gruyter, 1978.
- Sowinski, Bernhard(1983): Textlinguistik. Stuttgart et al.: Kohlhammer, 1983.
- Werle-Eggers(1961): Deutscher Wortschatz. Stuttgart: Klett, 1961.
- Wunderlich, Dieter(1975): Zur Konventionalität von Sprechhandlungen, in: D. Wunderlich(Hg.): Linguistische Pragmatik. Wiesbaden: Athenaion, 1975 (1972), S.11-58.
- Zillig, Werner(1980): Textakte, in: G.Tschauder/E.Weigand(Hg.): Perspektive: textextern. Akten des 14.linguistischen Kolloquiums, Bochum 1979, Bd.2, Tübingen: Niemeyer, 1980, S.189-200.
- (1982): Textsorte Rezension, in: K.Detering/J.Schmidt-Radefeldt/W.Sucharowski(Hg.): Sprache erkennen und verstehen. Akten des 16.linguistischen Kolloquiums, Kiel, 1981, Tübingen: Niemeyer, 1982, S.197-208.

Über das Textmuster "Einbandtext"

- Ein Ansatz zur kontrastiven Textstrukturanalyse -

Yoshinori NISHIJIMA

In der vorliegenden Arbeit geht es zuerst um die linguistisch-stilistische Beschreibung des Textmusters "Einbandtext". "Einbandtext" ist ein Text, der hinten auf dem Buchdeckel gedruckt ist. Dann wird andeutungsweise versucht, anhand dieses Textmusters einen deutschen und japanischen Einbandtext kontrastiv zu analysieren.

Das hier vorgeschlagene Textmuster hat zwei Ebenen: 1) eine abstrakte semantisch-funktionale Struktur und 2) deren manifestierte morpho-syntaktische, d.i. stilistische, Struktur. Auf der Grundlage dieses Textmusters wird die kontrastive Textstrukturanalyse durchgeführt.